慶應義塾大学ビジネス・スクール

大阪茶屋町劇場開場5周年事業

1995年(平成7年)秋、大阪茶屋町劇場の制作プロデューサー鍋島浩は同僚の山本明とともに1997年秋に当劇場開場記念公演の企画準備に入った。当劇場は、親会社である阪急電鉄株式会社の新社屋建設に伴う梅田駅北側の再開発の中で開設されたものである。当ビルは、オフィススペースの他、大阪でもハイレベルのホテルと位置づけられるホテル阪急インターナショナル、梅田駅南側から移転した劇場「飛天」(現在の名称は移転前の梅田コマ劇場)、そして大阪茶屋町劇場が併設された複合ビルであった。

開場5周年の記念公演にあたって、大阪茶屋町劇場には以下のような選択肢があった。すなわち第一に当劇場が自主主催企画公演をすることである。この選択肢には当該企画を他劇場に売るという売り公演の可能性も考えられた。第二には東京の劇場などの自主企画公演を買う、いわゆる買い公演であり、この場合企画した組織に一定の金額を支払うというものである。第三の選択肢は東京の劇団やプロダクション、テレビ局などと共同企画(Co-Production)で東京と大阪で公演し、収益を按分するというものである。

鍋島浩はこれらの企画案を前にして、劇場設立のミッション、企画単体の採算性、記念公演のあり方などを考えながら、どの選択肢を選べばいいのか思い悩んでいた。

○阪急電鉄と演劇

大阪茶屋町劇場は阪急電鉄株式会社の大阪梅田地区北再開発事業の一環として、梅田コマ劇場(昭和31年開場)の移転を契機に、阪急電鉄およびコマスタジアムの出資で「ちゃやまちアプローズ」[1]内に劇場飛天と同時に第二劇場として併設された。阪急電鉄の演劇との関わりは、1910年(明治43年)の箕面有馬電気軌道(株)の営

---

[1] 平成4年11月開業、建物の正式名称は阪急茶屋町ビルディング。地上34階:高さ161m　地下3階
フロアの構成は大阪茶屋町劇場:地下3～地下1階　劇場飛天地下3階～7階、
ホテル阪急インターナショナル1～6階　25～34階 、オフィスフロア9階～23階。

このケースは慶應義塾大学経営管理研究科教授　和田充夫　と新国立劇場営業一課長　飯島健　と(社)日本芸能実演家団体協議会　加藤雅代　がクラス討議の資料として作成したものであり、経営状況の適否を例示しようとするものではない。